

# 意図的および無意図的に想起された自伝的記憶の性質の違い

－不快気分時に想起されたポジティブ記憶の観点から－

○橋本淳也<sup>1</sup>・小林亮太<sup>1</sup>・柏原志保<sup>1</sup>・平本亮介<sup>1</sup>・原口優輔<sup>1</sup>・本多樹<sup>1</sup>・井石田紀香<sup>2</sup>・井岡崎  
彩香<sup>2</sup>・井岸本和美<sup>2</sup>・井中野歩菜見<sup>2</sup>・井堀之内滉<sup>2</sup>・朱建宏<sup>1</sup>・井孫玥澤<sup>1</sup>・山本一希<sup>1</sup>・  
難波修史<sup>1</sup>・宮谷真人<sup>1</sup>・中尾敬<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科, <sup>2</sup> 広島大学教育学部)

過去に経験した個人的経験の記憶を自伝的記憶という。不快気分時にはポジティブな自伝的記憶が想起されることがあり、このような記憶は気分の改善をもたらす(気分改善効果; Josephson et al., 1996)。気分改善効果は、記憶を自ら思い出そうとする意図的想起について検討が行われてきたが、近年になって、意図せず記憶が想起される無意図的想起でも生じることが報告されている(橋本他, 2018)。しかしこれらの想起形態間で気分改善効果には違いがあり、うつ傾向のある人では意図的想起よりも無意図的想起で気分改善効果が大きいことが示されている(橋本他, 2019)。

このような想起形態による気分改善効果の違いをもたらす要因は明らかではないが、気分改善効果には想起された記憶の性質(例えば記憶の重要度; 榊, 2005)が影響することが示されており、想起形態によって想起される記憶の性質が異なる可能性が考えられる。しかしその性質の違いは明らかではない。そこで、本研究では意図的想起と無意図的想起とで想起される自伝的記憶の性質の違いがあるのかについて検討した。

## 方法

**実験参加者** 大学生 73 名(女性 43 名, 平均年齢 20.3 歳,  $SD=1.4$ ) が実験に参加し、意図的/無意図的想起条件にランダムに割り当てられた。

**刺激語** ポジティブな自伝的記憶の想起を誘発する手がかり語として、修学旅行、遠足、合格、入学、花見、初恋の 6 語を使用した。

**想起課題** Schlagman & Kvavilashvili (2008) を参考に課題を作成した。課題では PC の画面中央に刺激語、画面周囲に複数の線分が呈示された。意図的想起条件の参加者には中央の単語に注目し、過去の経験について想起するよう求めた。無意図的想起条件の参加者に対しては、周囲の線分に注目し、線分が縦になったときにスペースキーを押すよう求めた。これにより、参加者の課題とは無関連に呈示される刺激語から無意図的想起が誘発される事態を作り出した。

**記憶質問紙** 初めに 6 語の刺激語による課題中に記憶の想起の有無を尋ねた。続いて想起された記憶の性質として、感情価、鮮明度、重要度、想起にかけた努力、気分への影響(いずれも 7 件法)、および特定性(特定の・概括的)について尋ねた。

**手続き** 参加者は実験に関する教示を受けた後、課題の練習を行った。練習終了後、ネガティブ気分誘導のために 12 枚の不快画像の呈示を行った。条件に応じた想起課題を行った後、記憶に関する質問紙への回答を求めた。また想起課題の前後で気分測定(日本語版 PANAS; 佐藤・安田, 2001)を行った。

## 結果と考察

無意図的想起条件において、記憶の想起が生じなかった参加者等を除外し、解析には 57 名のデータを用いた。記憶の各性質について、参加者ごとに平均値を算出した。各性質について意図的/無意図的想起条件間に対応のない  $t$  検定を行い、Holm 法による調整を行った(Table 1)。その結果、想起にかけた努力のみ有意傾向が見られたが、他の性質に有意差はなかった。

本研究で用いた手がかり語が特定の出来事を想起しやすく想起できる記憶が限られていたため、2 つの想起形態間の違いが見られなかった可能性が考えられる。

Table 1

想起された記憶の性質の平均値と標準偏差

|        | 意図   |      | 無意図  |      | $t(52)$           |
|--------|------|------|------|------|-------------------|
|        | $M$  | $SD$ | $M$  | $SD$ |                   |
| 感情価    | 1.85 | 0.60 | 1.93 | 0.30 | -0.49             |
| 鮮明度    | 4.73 | 0.97 | 4.14 | 1.46 | 1.70              |
| 重要度    | 4.09 | 0.93 | 4.17 | 1.51 | -0.25             |
| 努力     | 2.54 | 1.18 | 1.87 | 0.67 | 2.50 <sup>†</sup> |
| 気分への影響 | 3.85 | 1.23 | 3.30 | 1.40 | 1.53              |
| 特定性    | 0.90 | 0.15 | 0.74 | 0.37 | 2.16              |

Note. 特定性のみ特定のと回答された割合を示す

<sup>†</sup> $p < .10$

## 主な引用文献

Schlagman & Kvavilashvili (2008). *Memory & Cognition*, 36, 920-932.

謝辞 JST, COI, JPMJCE1311 の支援を受けた。